

参考資料：携帯電話使用と腫瘍に関するイタリアの労災認定判決に対する専門家の科学的見解

控訴裁判決に関する見解

イタリア国立衛生研究所のスザンナ・ラゴリオ博士とパオロ・ヴェッキア博士は、次のような文書を発表しています¹。

「この評決で、判事は重大な誤りのある原告側証人の証言に依拠していました。本件の証人は、このトピックならびに法医学の疫学全般に疎いことは明らかでした。携帯電話使用によるがんリスクに関する科学的証拠を恣意的に選択し²、関連する疫学研究の誤解を招く解釈と共に提示しました。個人レベルでの因果関係の推論に必要な要件は考慮されず、個人のリスクの推定を導出するのに不適切な手法が用いられました。」

最高裁判決に関する見解³

英国リーズ大学のパトリシア・マッキニー名誉教授は、次のように述べています。

「携帯電話使用の健康リスクについての多くの詳細で包括的な科学的報告では、脳腫瘍との関連は見つかっていません。長期的使用に関する証拠を得るには更なる研究が必要ですが、携帯電話ユーザー数の増加にもかかわらず、脳腫瘍の発症率はここ数十年間に上昇していません。」

王立バークシャー病院の医療物理学・臨床工学部長であるマルコム・スパーリン教授は、次のように述べています。

「この患者は、携帯電話を相当使用していて、病気を発症したと主張しているようです。電話との関連は確かにありますが、電話が影響を生じたとは限りません。例えば、電話をあてがった結果、長期的な局所的圧迫、または皮膚からの熱伝導の減少による局所的な温度上昇によって、神経損傷が生じた可能性があるかも知れません。長期的な携帯電話使用がリスク上昇の指標かも知れないということも指摘されていますが、メカニズムに関しては何も主張されていません。携帯電話と脳腫瘍について結論に飛躍する前に十分な注意が必要です。」

¹ 「イタリアの一裁判所は携帯電話使用者の三叉神経腫瘍が職業由来であると認める：科学と法律との複雑な関係のケーススタディ」

Lagorio S, Vecchia P. *La Medicina del Lavoro* 2011;102(2):144-162.

<http://www.ncbi.nlm.nih.gov/pubmed/21485052>

² 本訴訟で原告側証人は、ハーデル教授らによる研究を「独立した研究」とする一方、国際がん研究機関（IARC）がコーディネートした国際共同疫学研究「インターフォン研究」については、携帯電話メーカーから共同出資を受けたことを理由に「独立ではない」としています。

実際には、インターフォン研究に対しては、欧州連合（EU）及び各国公的機関、ならびに産業界（モバイル・マニュファクチュアラーズ・フォーラム（MMF）及び GSM アソシエーション）が半分ずつ拠出しましたが、産業界からの資金は国際対がん連合（UICC）を介しており、UICC が同研究の独立性を担保しています。

http://interphone.iarc.fr/interphone_funding.php

³ 「脳腫瘍と携帯電話使用についてのイタリアの判決に対する専門家の反応」

Science Media Centre. October 19, 2012. Expert reaction to Italian ruling on brain tumours and mobile phone use.

<http://www.sciencemediacentre.org/expert-reaction-to-italian-ruling-on-brain-tumours-and-mobile-phone-use/>⁴ 「ワイヤレス電話使用と脳腫瘍及びその他の頭部腫瘍についての系統的レビュー」

ローマ大学ラ・サピエンツァ校の客員教授で、世界保健機関（WHO）の国際電磁界プロジェクトの元コーディネータであるマイケル・レパチョリ博士は、次のように述べています。

「私は最近、国際的な 14 人の科学者と共著で、このトピックに関する綿密で系統的で透明性のあるレビューを発表しました⁴。脳腫瘍と携帯電話使用との関連はないという点について、私たち全員が同意しました。私の意見では、イタリアの裁判所の判決は、確たる科学的証拠に基づくものではありません。更に、裁判所は電磁界の分野における確立された専門家からの助言を得ようとする努力をほとんどしていません。」

これらの声明は、世界中の保健当局及び専門家組織の助言⁵とも一致しています。例えば、WHOは次のように結論付けています。

「携帯電話が潜在的な健康リスクをもたらすどうかを評価するために、これまで 20 年以上にわたって多数の研究が行われてきました。今日まで、携帯電話使用を原因とするいかなる健康影響も確立されていません。」⁶

以上

⁴ 「ワイヤレス電話使用と脳腫瘍及びその他の頭部腫瘍についての系統的レビュー」

Repacholi MH, Lerchl A, Rösli M, Sienkiewicz Z, Auvinen A, Breckenkamp J, d'Inzeo G, Elliott P, Frei P, Heinrich S, Lagroye I, Lahkola A, McCormick DL, Thomas S, Vecchia P. Systematic review of wireless phone use and brain cancer and other head tumors. *Bioelectromagnetics* 2012;33(3):187-206.

<http://www.ncbi.nlm.nih.gov/pubmed/22021071>

⁵ 例：

ノルウェー公衆衛生研究所、報告書 2012:3 「低レベル無線周波電磁界 - 健康リスク評価及び規制状況の考課」 (Norwegian Institute of Public Health, FHI-Rapport 2012:3. Svake høyfrekvente elektromagnetiske felt – en vurdering av helserisiko og forvaltningspraksis.

http://www.fhi.no/eway/default.aspx?pid=238&trg=MainLeft_5895&MainArea_5811=5895:0:15,2829:1:0:0:::0:0&MainLeft_5895=5825:99168::1:5896:1:::0:0

スウェーデン労働生活・社会研究評議会、「無線周波電磁界と病気：10 年間の研究の要約」

(Swedish Council for Working Life and Social Research, RF EMF and ill Health: 10 Years Research Summary.

<http://www.fas.se/en/News/2012/10-years-of-research-on-the-health-risks-of-radiofrequency-fields/>

英国保健防護庁、「非電離放射線に関する諮問グループ報告 2012」

(UK Health Protection Agency, AGNIR Report 2012.

<http://www.hpa.org.uk/NewsCentre/NationalPressReleases/2012PressReleases/120426Mobilephones>)

⁶ 世界保健機関（WHO）ファクトシート No.193 「電磁界と公衆衛生：携帯電話」

http://www.who.int/peh-emf/publications/facts/FS193_June2011_Japanese.pdf